

## 南北朝間の使節よりみた「文化」の多様性

堀内淳一

はじめに

南北朝時代というと、華北にある鮮卑の王朝である北魏と、江南の漢人王朝との間で常に戦争状態にあったかのように思われることが多い。しかし実際には、兩朝は戦争状態よりも、平和的な使節を送りあっている期間の方が遥かに長かった。南北朝の間で交換された使節は記録に残されているだけでも二〇〇例近く<sup>1)</sup>のほり、平均すると一年に一度の頻度で使節が送られていた。

南北朝の使節についての一般的な理解は、岡崎文夫の「兩國とも使節の人物には非常な注意を拂ひ、必ず文辭あり、辯舌に巧みな者を以て之に當たらせる。其文章に於て又學問に於て、南朝は固より遙かに北朝に優つて居る」というものであり、この文章の元となった清の趙翼『廿二史劄記』の記述を大きく出るものではない。<sup>1)</sup>

現在の魏晉南北朝の使節に関する研究の多くは、その重點を南朝の文化に置いている。梁滿倉や牟發松は南北朝の文化比較を行ない、この時代の文化を北朝文化が南朝文化を吸収し超越していく過程であると結論している。<sup>2)</sup> また張承宗も、三國から隋の統一までの南北朝間の使節を含めた人の移動を概括し、北朝文化が南朝の影響を大きく受けていることを強調する。<sup>3)</sup> いずれも使節の文化的側面を重視し、南朝文化の北朝に對する優越を述べるものである。

また、南朝後期を代表する二大詩人である徐陵と庾信の遣使について、吉川忠夫が徐陵、矢嶋美都子が庾信について、それぞれ研究している。<sup>4)</sup> このうち矢嶋は、六朝貴族の理想を體現したような、庾信の文章辭令に優れ、見た目も美しく威風堂々としていた點が、南朝の使者に選ばれた資質であったとする。こうした南朝文化を重視する研究の中で、吉川忠夫は當時の典籍流通に注目し、史書に見られる引用・典故表現から使節を運

び手として南北朝間で典籍・詩文などのやりとりが頻繁に行なわれていたことを明らかにしている。ただしその際、文學と史學に關しては南風が北風を完全に壓倒したが、儒學と佛教に關してはその圖式が當てはまらない、と述べていることに留意すべきである。

これまで、六朝の文化といった場合、多くは南朝の文化を意味していた。しかし、魏晉南北朝の文化の理解は、南朝だけでは十分とはいえない。六朝に續く隋・唐はいずれも北朝から出ており、隋唐の文化に北朝の文化が與えた影響も少なくないからである。從來の研究の多くが南朝文化のみを重視するのは、南北朝の使者が同じ文化的基準に立脚していたことを前提とするためであろう。南朝の基準に従って、南朝の北朝に對する優越を結論づけているように思われる。しかし、「文辭」や「辯舌」の内容を史料から具體的に見てみると、「文化」そのものについての捉え方が、南朝貴族の考えるものと北朝貴族の考えるものでは異なっていたことがうかがわれる。

本稿では、南北朝間の使節に關する記事をもとに、南北朝時代における「文化」が實際にはいかなるものであったのかを考えてみたい。南北の士人が直接對面する使節交流の場でこそ、南朝と北朝の文化の共通點と相違點がはっきりと現れるためである。

## 一、使者の選定とその背景

使者が體現している「文化」について検討する前に、使者がどのように選ばれ、いかなる背景を持っていたかを見る必要がある。使者選定の具體例として、劉宋の劉善明が、後廢帝の元徽元（四七三）年、北魏への使者を推薦した記録から検討してみたい。

元徽の初、北使を遣はすに、朝議は善明をして人を舉げしめ、善明は州郷の北平の田惠紹を舉げて虜に使はしめ、贖ひて母の還へるを得。

劉善明は母が北魏の捕虜となり、それを朝廷の士人たちは憐れんでいた。そのため「朝議」は使節の人選を劉善明に委ね、劉善明は田惠紹を推薦して、北魏の捕虜となっていた母親を贖わせた。田惠紹は、このとき員外散騎常侍の官位を帶び、使節の正使となつてゐる（『魏書』卷九十七島夷劉裕傳）。劉善明に委ねられていたのは正使の人選であり、それは「朝議」によつて個人に委ねうるものであったといえる。また、劉宋末には王儉と虞玩之が正使の人選を巡つて争つた記事があり（『南齊書』卷三十四虞玩之傳）、この場合も使者の選考に關わつていたのは王儉ら有力な貴族であつた。

一方、北朝では、北齊の天平四（五三七）年、東魏から梁へ派遣する使節を選ぶ時の事例がある。

天平の末、魏は梁と和好せんと欲し、朝議は將に崔陵を以て使主と爲さんとす。陵曰く「文采と識は、陵は李諧を推さず。口頰の願願たる

は、諸乃ち大いに勝る」と。是に於いて諸を以て常侍を兼ね、盧元明に吏部郎を兼ね、李業興に通直常侍を兼ねて聘せしむ。

朝議によつて推された崔陵は自分の代わりに李諸を推薦し、そのまま李諸が正使となっている。ここでも實質的に使者の選考にあたつたのは「朝議」であり、崔陵のような有力な貴族であつた。また、『魏書』卷四十八 高推傳には、游雅が高推を薦めて使者の選考に應じさせている事例も見られる。

これらの記事には、皇帝の意向が現れず、また、南北雙方の記事を見ても、皇帝が直接使者を指名した記録は見られない。これらの事例から、使者を選ぶ際には、朝議や有力な貴族が推薦権を持ち、皇帝はそれを承認するだけであつたと考えられる。

したがつて、使者の選考基準には、個人的な資質だけでなく、一國を代表する貴族に相應しい家柄も求められた。

（李渾の）子の湛、字は處元。文史を涉獵し、家風有り。太子舍人と爲り、常侍を兼ね、聘陳使副たり。涇陽縣男を襲爵す。渾と弟の繪・緯は俱に聘梁使主と爲り、湛も又た使副と爲る。是を以て趙郡の人士は、目して四使の門と爲す。

趙郡の李氏は華北漢族の中でも有数の名族である。その李氏であつても四人の使者を出したことは、郡の士人に「四使の門」と注目されるだけの大事であつた。<sup>11</sup>北魏では邢祐、邢產父子が使者となり、それを時人は美としたとあり（『魏書』卷六十五 邢產傳）、邢產の從兄弟である邢穎、その子の邢巒も使者に選ばれている。また、趙郡の李氏と並ぶ名族の范陽の盧氏のように、盧玄・盧度世・盧昶・盧元明と四代に渡つて使者を輩出している家柄も存在した（『魏書』卷四十七 盧玄傳）。

南朝でも南郡の蕭氏から蕭琛、蕭琛の孫蕭密、蕭密の族兄蕭允の三人が聘北使に選ばれており、また南齊で相繼いで使者となつた范縝・范雲は從兄弟同士、梁で使者となつた劉孝儀・劉孝勝は兄弟であり、明僧嵩と明少遐も、三代離れているものの同族である。

北朝、南朝共に、同じ一族から使者の選ばれる例が數多く見られるが、その傾向は南北でやや差がある。南北を比較すると、北朝の方がより限られた氏族が使者の職を獨占しており、南朝では北朝の李氏や盧氏のように一族から四人、五人もの使者を出すような家系は存在しない。また、北朝では特に家柄の良い李氏や盧氏などが使者に選ばれたのに對し、南朝で使者に選ばれた蕭氏・范氏・劉氏・明氏などは、必ずしも南朝の中で優遇されていたわけではなかつた。蕭氏と范氏はもとより南方の出身、劉氏と明氏は遅くに南渡した一族である。實際、南朝で最も良い家柄とされた王氏や謝氏、庾氏から使者となつた者はほとんどいない。<sup>12</sup>これらの差は、北朝が南朝に對して使者を選ぶ基準と、南朝が北朝に對して使者を選ぶ基準がそれぞれ異なつていたことを示すといえよう。

しかし、それでもなぜ同じ一族の間が選ばれるのだろうか。使者として相應しいとされる資質が、書籍といった形で特定の家柄に伝えられた

ことはその有力な原因といえる。使者は他國へ行った際に、最新の情報や典籍を持ちかえり、あるいは自らその見聞を記録し、それを一族に傳えた可能性がある。北齊で藏書家として知られた人間の多くが南朝に使者として赴いたことがあり、それを限られた人間に見せていたことは、その蓋然性を高めるものである。<sup>13)</sup>

また、役割を終え、歸國した使者が、その見聞を本にまとめることも多く行なわれていた。陳の姚察は北周に使いして『西聘道里記』を著し、江德藻は北齊に使いして『聘北道里記』三卷を著した。『隋書』經籍志には同様の書物として劉知師『聘遊記』三卷がみられ、また北齊の李綸による『封君義行記』や李諧『李諧行記』といった書名が並んでおり、これら南北朝の使者の手による書物は、親族のあいだで回覧されたと考えてよい。使者としてのノウハウが一族のあいだで蓄積されたのである。當時の書物は、印刷技術のない時代であるから、誰でも容易に見られるものはなかった。しかし、著者の一族であれば、著書を目にする機会は多かったであろう。當時の文化が「書物」という形で一族内に蓄積されていたことは、使者の職が特定の貴族に偏る一因であつたろう。

このように、使者が貴族によつて、特定の家系から選出されることは、官職の世襲を前提とし、「文化を占有している者」が「國家を代表する權威」を帯びるという貴族制の理念に極めて忠實であるといえよう。

## 二、使節による文化交流の具體的事例

南北朝時代、南朝、北朝ともに、國內的には自らの國を「中華」とみなし、相手の國を「索虜」「島夷」と蔑稱で呼んでいた。中華思想において、文化の優劣はそのまま「中華」という權威の所在と関連している。自國の文化が相手よりも優れていることを示すことは、自國の正統性を證明し、相手の正統性を大きく傷つける意味を持っていたのである。

北齊の實質的な建國者である高歡は、官吏の汚職を取り締まるように言う杜弼に對し、

江東に復た一吳兒の老翁の蕭衍なる者有り。専ら衣冠禮樂を事とし、中原の士大夫は之を望みて以て正朔の在る所と爲す。我れ若し急ぎ法網を作り、相饒借せずんば……士子は悉く蕭衍に奔らん。<sup>14)</sup>

と語っている。この記事は當時の胡漢對立が激しくなった東魏の國內事情を反映したものであり、そのまま前後の時代に延長することは出来ないが、漢人士大夫が南朝に正朔の所在があると認めた理由が「衣冠禮樂」にあったことは注目されてよい。「衣冠禮樂」という文化の問題は中原の士

大夫の去就を左右するほど重要な要素と見られていたのである。

それゆえ、南北雙方の皇帝は、使者の舉動に大變な注意を拂っていた。

宴日、齊文襄（高澄）は左右をして之を覘はしめ、賓司の一言勝を制さば、文襄は之が爲に掌を拊つ。魏使の梁に至るも、亦た梁使の魏に至るが如し。梁武親ら與に談説し、甚だ相愛重す。<sup>⑩</sup>

北齊の文襄帝が使者と賓司の一言毎に一喜一憂したのは、それが單なる宴席上の會話ではなく、兩國の權威高揚のために重要な意味を持っていたからである。梁の武帝の場合も、皇帝自らが南朝の文化を體現することによる政治的な効果は計り知れなかったであろう。

では、そのような文化の優劣を競う争いが、使節交流の場でのように現れたか。まずはその具體例として、李業興の遣使を見てみる。

李業興は上黨郡長子の人で、代々儒學を家學としていた。北魏の天平四（五三七）年七月、東魏と梁との間で和平が成立し、正式に使節が送られると、李業興は副使に選ばれた。

江南に到着した李業興一行に、梁の武帝蕭衍は側近の朱异を遣わして質問させた。

（蕭）衍の散騎常侍の朱异（李）業興に問ひて曰く「魏の洛中の委粟山は是れ南郊なるや」と。業興曰く「委粟は是れ圓丘、南郊に非ず」と。异曰く「北間郊・丘は異所なり。是れ鄭の義を用ふ。我が此の中は王の義を用ふ」と。業興曰く「然り。洛京の郊・丘の處は専ら鄭の解を用ふ」と。异曰く「若し然らば、女子の傍親に逆降するも亦た鄭に従ふを以てするやいなや」と。業興曰く「此の一事は、亦た専らは從はず。若し卿此の間に王の義を用ふれば、禪を除くは應に二十五月を用ふべし。何を以てか王儉の喪禮の禪は二十七月を用ふるや」と。异遂に答へず。<sup>⑪</sup>

李業興は北方の大儒、徐遵明の弟子で、『春秋左氏傳』のみならず、諸子百家・圖緯・風角・天文・占候・算曆にも通じていた。一方、朱异もまた、若くして五經、特に『禮』と『易』を治め、五經博士である明山賓の推舉を受けて顯貴に至っており、南朝の儒學の中心的人物であった。

朱异と李業興は南北の學風の違いについて議論している。北朝では鄭玄の學が、一方の南朝では王肅の學が、それぞれの主流であった。これは後漢から曹魏において鄭玄の注釋が主流であったのに對して、西晉では外戚でもある王肅の注釋を採用したことによ來する。北魏の儒學者は、山東や隴西の出身が多く、これらの地域は漢魏の遺風を強く残していた。一方、東晉南朝の儒學は西晉以來の王肅の解釋を受け継ぎ、そのため南北朝間で經典の解釋が異なることとなった。<sup>⑫</sup>

鄭玄と王肅の解釋で、顯著な差が現れる部分の一つが、ここで李業興と朱异が議論している「丘・郊の問題」、「女子逆降の問題」、「三年喪の期

問の問題」などである。鄭玄は丘と郊を別のものとし、王肅はこれらが同一であるとする。また、鄭玄は公や大夫の位にある者は女子のために喪に服さずとしたが、古文派であった西晉の荀顗はそれを禮制から省こうとする。鄭玄はまた、三年の喪の期間を實質二十ヶ月であるとしたが、王肅は二十五ヶ月と解釋している。

ただし、李業興と朱异が互いに相手が同一の解釋に基づいていないことを非難し合っているように、これらの北朝—鄭義、南朝—王義という原則が完全に守られているわけではなかった。それでも、李業興や朱异は、解釋から外れた事例も含めて、兩朝の學風の差異をはつきりと認識していたのである。

李業興は、朱异に次いで梁の武帝とも議論をしている。まず、武帝は李業興に、何を得意としているかを尋ねている。

蕭衍親ら業興に問ひて曰く「聞くならく卿は經義を善くす」と。儒・玄の中、通達する所は何れぞ」と。業興曰く「少くして書生と爲るも、止<sup>定</sup>五典を讀むのみ。深義に至りては、通釋を弁ぜず」と。<sup>19)</sup>

ここでの李業興の言葉は謙遜であろうが、儒教については「五典を讀むに止まる」と言いながら、深義、すなわち玄學については「通釋を弁ぜず」と言い、儒學に比べて、玄學の知識の少ないことを自ら認めている點は注目しておきたい。

このような應酬の後、武帝は業興に對して『詩經』『尚書』『易經』『禮記』について、それぞれ議論を行っている。

まず、『詩經』については、武帝が『詩經』周南を周公の地で采られたもの、召南を召公の地で采られたものとする根據を尋ね、それに對して李業興は『儀禮』鄉飲酒禮の鄭玄の注を引いて答えている。

また、『易經』については、

衍又た問ふに「乾卦の初は『潛龍』と稱し、二は『見龍』と稱し、五は『飛龍』に至る。初は名を虎と爲す可し」と。問の意小や乖<sup>はな</sup>る。業興對へて「學識膚淺にして、仰ぎ酬ゆるに足らず」と。<sup>20)</sup>

とある。乾卦は『易經』の最初の卦である。その中に現れる「龍」という語を「虎」と言つてもよいという武帝の問いかけは、『易經』乾の文言傳に「雲の龍に従ひ、風の虎に従ふごとし」と、龍と虎とを併記していることに基づいている。しかし、文言傳が「虎」と述べているのは九五についてであり、初九を「虎」とは述べていない。この點を『魏書』は「問の意小や乖る」と評しているのであるが、李業興はこの問いに學識が淺いため答えられないとして回答を避けている。

『尚書』については、武帝は『尚書』堯典の「正月上日、終を文祖に受く」の「正月」が何正によるのかと問い、李業興は『尚書中候』を引いて

夏正としている。また、堯の時代にどの曆が使われていたかを問う武帝に、それが知り得ないことを『周禮』地官媒氏を引いて説明している。

『禮記』については、『禮記』檀弓下の故事を引いて、孔子が古い友人である原壤の不孝を見逃したことについて問うと、李業興は『禮記』の經文からそれに答え、また武帝が原壤の出身を問うと、李業興は鄭玄の注によって説明している。そして、その後も李業興は武帝の質問にほとんどみなく答えた。

しかし、最後に、武帝が再び玄學について尋ねると、

衍又た問ふに「易に太極と曰ふは、是れ有るや無しや」と。業興對へて、「傳ふる所には太極是れ有りと。素より玄學せず、何ぞ敢へて報酬せん」と。

と答え、回答を避けている。

二人は『詩經』、『易經』、『尚書』、『禮記』と五經のうち『春秋』を除くすべての經典に關して議論を繰り廣げている。この中で、李業興は『詩經』『尚書』『禮記』については見事な弁舌で武帝の質問に答えているが、『易經』に關する質問だけは「學識膚淺にして、仰ぎ酬ゆるに足らず」と述べて議論を斷っている。最後の玄學についての質問も、李業興は「素より玄學せず、何ぞ敢へて報酬せん」と答え、婉曲的な批判である可能性はあるが、再び玄學は學んでいないと斷っている。玄學は西晉で流行し、その後を繼いだ東晉南朝で盛んであり、『易經』は玄學のテキストとしても用いられていた。武帝が儒學のみならず玄學までも嗜んでいたことに比べて、李業興は儒教の知識は豊富に持つていても、玄學については議論出来るほどの知識を持つていなかったといえよう。

また、ここでは五經のうち『春秋』だけが扱われていない。「止五典を讀むのみ」と答えた李業興も、『春秋問答』を著した梁の武帝も（『梁書』卷三武帝紀下）、間違ひなく『春秋』についての知識があつたであろう。

それにもかかわらず、『春秋』が他の經書と違ふ扱いを受けている理由として、『漢書』藝文志では『太史公書』が「春秋類」として『春秋』と並べられているように、南北朝時代以前は、歴史は經學の一部と認識されていたことが擧げられる。魏晉南北朝時代はそれが「史學」として認められてくる過渡期である。<sup>24)</sup>南北朝では盛んに史書を編纂し、過去の史書に注釋をつけることが行われた。南朝では范曄『後漢書』、沈約『宋書』、蕭子顯『南齊書』が編纂され、また、裴松之が『三國志』の注をつけ、その子の裴駟が『史記集注』を著すなど、史學が隆盛であつた。一方、北朝では北魏初期には崔浩が國史事件で誅戮を被り、『十六國春秋』を著した崔鴻は、その内容が罪に問われるのを恐れて終生その書を公にせず、北齊で魏收によつて作られた『魏書』はその制作直後から「穢史」の評價を受け、その偏向を非難されていた。北朝では史書が作られていたもの

の、常に史學に對して政治的壓力が加え續けられていた。そこには、もともと鮮卑の王朝であつた北魏が、禪讓を受けて成立した王朝ではなく、そこから禪讓を受けた北朝の諸王朝も、漢魏以來、禪讓によつて王朝交代を繰り返してきた南朝に比べて歴史的傳統を主張しにくいという事情が影響していた。梁の武帝との會見で、李業興が實際に議論しなかつたのか、あるいは議論の内容が記録に残されなかつたのかは知り得ないが、『春秋』に關する議論が『魏書』に記録されていない背景には、編纂時のそれを典型とする北朝内部の壓力が存在したのではないか。

儒學については、當時南朝で儒學においては一、二を爭う知識人であつた朱异をもやりこめることができた李業興だが、玄學について武帝に質問されると、全く返事をする事ができなかった。このように儒學に關しては北朝が、玄學に關しては南朝が、それぞれ得意としていた。また、史學については、南北朝が對峙する場で議論に上ること自體が少なかつたと考えられる。

このように、六朝時代は、漢代のように儒教が唯一の價值基準であつた時代と違い、儒學・玄學・史學など多様な價值觀が並存し、それらが互いに影響を與え合つていた。貴族はそれら多様な學問や宗教を萬遍なく學び、幅廣い教養を持つよう求められた。<sup>23</sup>そこで、節を改めて儒學、玄學、史學以外の分野、特に文學について見ることにする。

### 三、使者の體現する「文化」の範圍

前節では南北朝の使者の具體的事例から、當時の儒學や玄學の狀況の一端をみた。この節ではそれ以外の文化が南北朝間の交流の場でのうに現れていたかを検討したい。

まず、南北朝時代の文化の特徴ともいえる文學を取り上げる。唐代に編纂された『隋書』文學傳では、南朝と北朝を比較して、北朝は言葉が質實剛健であるが、理屈っぽくて政治に適しており、南朝は言葉の音が綺麗であるが、裝飾が意を覆い隠し、詠歌に適していると述べている（『隋書』卷七十六 文學傳）。詩賦に關して言えば、北朝文化は南朝文化の後塵を拜していたと言わざるを得なかつた。南朝の有名な詩人の作は、北朝にも傳えられており、例えば南齊の王融、梁の徐陵の作などは北朝の士人に愛好された。

上は（王）融の才辯なるを以て、十一年、主客を兼ね、虜使の房景高・宋弁を接せしむ。弁は融の年少なるを見、主客の年幾なるかを問ふ。融曰く「五十の年、久しく其の半を踰ゆ」と。因りて問ふに「朝に在りて主客の『曲水詩序』を作るを聞く」と。景高も又た云ふらく「北に在りて主客の此の製、顔延年に勝ると聞く。實に一見を願ふ」と。融乃ち之を示す。後日、宋弁は瑤池堂にて融に謂ひて曰く「昔相如の封



禪を觀、以て漢武の德を知る。今王生の詩序を覽、用て齊王の盛を見る」と。融曰く「皇家の盛明なること、豈に直だ蹤を漢武に比べんや。更に慙づらくは、鄙製以て遠く相如に匹する無からんことを」と。<sup>21</sup>

王融の「曲水詩序」は、その評判だけが北朝に届いており、房景高と宋弁は實物を見たことがなかった。そして、實物を見た宋弁は、漢の司馬相如に匹敵すると王融を持ち上げたのである。「曲水詩序」は彼らの手によつて書き寫され、北魏へもたらされたであらう。

また、南朝で「宮體」と呼ばれて庾信とともに一世を風靡した徐陵の文章は、「遂に之は華夷を被」つたとあるように（『陳書』卷二十六 徐陵傳）、南朝だけでなく北朝でも廣く受け入れられていた。このように北朝では南朝文學が持てはやされ、北齊の貴族の間では南朝文人の誰を尊敬するかによつて黨派を結んで争う狀況となつた。

邢子才・魏收は俱に重名有り。時俗準的し、以て師匠と爲す。邢は沈約を賞服して任昉を輕んじ、魏は任昉を愛慕して沈約を毀り、談議する毎に、辭色之を以てす。鄴下紛紜し、各々朋黨有り。祖孝徵嘗て吾に謂ひて曰く、「任・沈の是非は、乃ち邢・魏の優劣なり」と。<sup>22</sup>

北齊で一、二を争う文人としてライバル關係にあつた魏收と邢邵は、ともに南朝の文人に範を求めていた。魏收は任昉を、邢邵は沈約を、それぞれ信奉し、相手の尊敬する文人を貶すまでに至つた。任昉、沈約もまた、梁書において「謝玄暉（謝朓）は詩を爲すに善く、任彦昇（任昉）は文章に巧み、（沈）約は兼ねてこれ有るも過ぐる能はざるなり」（『梁書』卷十三 沈約傳）と評價され、時人も「任筆沈詩」（『梁書』卷十四 任昉傳）と並び稱される文人であつた。

このように、南朝の詩人の作品が北朝に運ばれる例は數多く見られるが、これとは逆に、北朝の詩人の作品が南朝にもたらされた例はほとんど見られない。<sup>23</sup>

また、特に北齊では、南朝への憧れが強く、梁からの使節が鄴に来るたびに、

梁使入る毎に、鄴下は之が爲に傾動し、貴勝の子弟は盛飾して聚り觀、禮贈は優れ渥く、館門は市を成す。<sup>24</sup>

と、熱烈な歡迎ぶりを見せた。當時の北齊の貴族にとつて梁の使節は、相手國の最新の流行を伝える貴重な情報源でもあり、また、南朝からの使者に當時一流の才人が任じられていたため、使者と交流すること自體、北齊の貴族にとつて榮譽であつた。

尙書僕射の崔暹は文襄の親任する所と爲り、勢は朝列を傾くも、（陽）休之は未だ嘗て請謁せず。暹の子の達拏は幼くして聰敏、年十餘にして、已に五言詩を作る。時に梁國通和し、聘使館に在り。暹は達拏の數首の詩を持ちて諸朝士の才學有る者に示し、又た梁客に示さんと欲す。餘人は暹を畏れ、皆な宜しきに隨ひて應對すべしとす。休之獨り正言して、「郎子は聰明、方に偉器と成るべし。但だ小兒の文藻にして、

未だ以て遠人に示す可からざるを恐る」と。

崔暹は自分の子供を自慢したい一心から、南朝の使者に子供の作った詩を見せようとした。崔暹の權勢を恐れ、その場にいた朝士は適當に相槌を打とうとしたが、陽休之は一人それを止めるように發言したのである。このように、梁の使者に譽められることは、榮譽と考えられていたのである。

儒學、玄學、史學、文學の外に、當時の重要な文化として佛教がある。五胡十六國から南北朝にかけて、西域から外國僧と佛典が中國國內に流入したことで、佛教は急速に盛んになった。中國風に解釋された佛教は、南朝でまとまった理論體系を作り上げつつあり、佛教は儒教に代わって貴族の心の大きな部分を占めるようになりつつあった。特に梁の武帝の佛教信仰は極端であり、佛教の教理に通じ、戒律を嚴守し、結果として後世に「釋教に溺れ、刑典を弛める」(『南史』卷七 梁本紀中 論曰條)とも評されたほどであった。

梁では武帝以下、何人もの高官がこぞって佛教を信奉しており、北朝の使者には、佛教についての知識も求められた。

(李同軌) 興和中、通直散騎常侍を兼ね、蕭衍に使す。衍深く釋學に耽り、遂に名僧を其の愛敬・同泰の二寺に集め、涅槃大品經を講ぜしむ。同軌を引きて席を預へ、衍は兼ねて其の臣を遣はし並びに共に觀聽せしむ。同軌 論難すること之に久しく、道俗咸な以て善と爲す。<sup>(28)</sup>

東魏の李同軌は、梁の武帝とともに佛教の講説を聞くことになった。ここで李同軌は、武帝の前で佛典について議論し、僧侶、俗人はみなそれに感心したとある。また、北齊の崔暹は、

(東) 魏・梁 通和し、要貴は皆な人をして遣り聘使に隨ひ交易せしむるに、(崔) 暹は惟だ佛經のみを寄求す。梁武帝 之を聞き、爲に繕寫し、幡花を以て唄を贊し送りて館に至らしむ。然れども大言を好み、調戲するに節無し。密かに沙門の明藏をして佛性論を著さしめて己が名を署し、諸を江表に傳へしむ。<sup>(30)</sup>

とあるように、南朝で佛典を買い求め、また、北朝で佛教書を代作させた上、南朝に傳えて名を賣ろうとした。陳から北齊に使いた徐陵、傅綽、陳から北周に使いた毛喜などは、本人が佛教を深く信奉しており、佛教に對して深い造詣を持っていた。<sup>(29)</sup> また、梁の武帝や北齊の文宣帝が佛教を好んだ影響もあり、南北朝時代後期の使者は、佛教に關する知識を必要とする局面が存在した。しかし、李同軌や崔暹の例から見られるように、南北朝の間には文學ほど學問水準の差が廣がっていなかった。佛教が本格的に傳播したばかりであり、南北朝を問わず盛んに信仰されたため、南北の格差があまり擴大しなかったであろう。

このような文化的な資質の他に、時として教養以外の才能をもつて、使者の任に充てられる者もあった。

高祖の時、范寧兒なる者有りて圍碁を善くす。曾て李彪と與に蕭蹟に使ひし、蹟は江南の上品の王抗をして寧兒と與せしむ。勝を制して還る。<sup>(32)</sup>

圍碁はこの時代の貴族の間で流行した遊びであり、宋や南齊では官職を賭けて皇帝が名人に圍碁の勝負をさせていたほどであった。南朝では圍碁中正なる官が置かれ、圍碁の腕前に應じて碁品が與えられた。王抗は自ら圍碁小中正に任じられ、第一品を得て、南齊一の圍碁名人とされていた(『南齊書』卷三十四 王謐傳 及び 卷四十六 蕭惠基傳)。その王抗を北魏の人間が負かすことは、大いに北魏の面目を立てることになると考えられ、圍碁の名手であった范寧兒は隨員に選ばれたのであろう。

圍碁だけでなく、武藝を競うことも南北の間で行なわれた。

(武定) 五年、梁使來聘し、武藝有りと云ふ。北人を求訪し、與に相角せんと欲す。世宗 猛を遣はして館に就き之に接せしむ。雙帶兩韃し、左右に馳射す。兼ねて共に力を試べ、強を挽く。梁人は弓兩張を引き、力は皆な三石。猛は遂に併せて四張を取り、疊ねて之を挽くに度を過ぐ。梁人 之に嗟服す。<sup>(33)</sup>

東魏の武定五(五四七)年、梁から來た使者は武藝に自信があり、北人と力較べをしたいと言ひ出した。このとき東魏を代表した綦連猛は、馬に乗ったまま左右に弓を射分け、力は四張の弓を一度に引くほどであり、梁人を感服させた。先の范寧兒の例とは逆に、騎射や相角は北朝の人間の得意とする所と考えられており、それゆえ梁の使者は北齊で力比べすることを求めたが、綦連猛のためにその目的を達することができなかったのである。

このように、使者には經學・史學・玄學・文學・佛教など廣汎な教養が必要とされ、その他にも、圍碁などの娛樂に關する分野や、弓など肉體的な優秀さが求められることすらあった。しかし、儒學、諸子百家、天文曆法に通じた東魏の李業興でも、梁の武帝に玄學を問われて返事に詰まったように、一人の使者がこれらすべての教養を體現することなど不可能であつたろう。

では、そのような様々な文化的基準の中から、どのようにして最も使者に相應しい人物を選ぶのだろうか。特に、當時から南朝に幾つかの分野で劣っていると認識されていた北朝が、どのような基準で使者を選んだか、もう一度、その文化的資質の面から考え直してみたい。

#### 四、北朝における使者の資質

南北の文化について、經學では北朝がやや優れているように見えたが、佛教ではほぼ同じ水準であり、玄學や文學では逆に南朝が北朝に優越していた。そのような差は、當時の人間も南北を問わず理解していたが、そのことを誰よりも痛切に感じていたのが、北魏の孝文帝であった。孝文帝が行なった一連の漢化政策は、北魏を南朝のような文明國家に作りかえることであつた。

その孝文帝は、南齊に使者に立つ盧昶と王清石に以下のように述べている。

高祖、昶に詔して曰く「卿は便ち彼に至らば、彼我存すること勿れ。江揚と密邇するは、晩に當るも早からず、是れ朕の物に會せん。卿等言はんと欲すれど、便ち相疑ひ難ずること無かれ」と。又た副使の王清石に敕して曰く「卿は本是れ南人なるを以て、言語致慮する莫し。若し彼の先に識る所を知る所有らば、見んと欲さは便ち見、須く論すべきは即ち論すべし。盧昶は正に是れ寛柔の君子なれど、多くは文才無し。或ひは主客卿に命じて詩を作らしめば、卿の知る所に率ひ、昶の不作を以て、便ち復た罷むること莫かる可し。凡そ使人の體は、和を以て貴しと爲す。遞<sup>たが</sup>ひに相矜誇し、色貌に見、將命の體を失ふ勿れ。卿等各々知る所に率ひ、以て相規誨せよ」と。

盧昶は華北の漢人家族、范陽の盧氏の出身であつたが、孝文帝は彼が文才に缺けると見なしていた。そのため、南齊での詩の交換をするときには恥をかかないよう、副使の王清石に、「文才のない盧昶だけに詩を作らせたりせず、お前も作るのだぞ」と言い含めたのである。

しかし、「寛柔の君子なれど、多くは文才無し」と評される人物が、なぜ南朝への使者に選ばれたのであろうか。

そのことに答えを出す前に、先に見た崔悛の例を再び取り上げたい。朝議に南朝への使者として推された崔悛は、それを辭退する際に、「文采と識は、悛李諧を推さず。口頰顧顧のたることは、諧乃ち大いに勝る」と述べている。

崔悛は清河の崔氏という名門の出身で、「狀貌偉麗にして容止に善し」「羣書を歴覽し、兼ねて詞藻あり」（『北齊書』卷二十三 崔悛傳）と評されていた。ただ、その性格は家柄と才能を鼻にかけて傲慢であり、しばしば周圍の人間と衝突していた。『魏書』を著した魏收とは犬猿の仲であり、崔悛にもその家柄を侮辱したせいで憎まれ、北齊の文宣帝には惡口を吐いたために殺されそうになっている。朝議はそれでも、その家柄や才能を高く評價して崔悛を使者に推したのである。しかし、彼は李諧よりも自分の方が文才に優れているが、南朝への使者には弁才に長けた李諧の方が相應しい、と言って正使を譲っている。

使者に必要なのは知識や文才よりも口達者なことである、とするこの崔悛の考え方は、先の盧昶の例を説明する上で有効である。盧昶も名族の

出身で、經學、史學を學び、若くして名聲を得ていた點で崔陵と共通している。これらの例から使者を選ぶ際に、文才よりも他の才能を優先させた可能性を考えられる。

そこで、北朝の使者が北朝と南朝でどのような評價を受けていたかを一覽にしたものが、以下の表「北朝使者の北朝と南朝での評價」である。

(表) 北朝使者の北朝と南朝での評價

使者名	北朝での評價	南朝での評價	出典
高推	早有名譽。	南人稱其才辯。	魏書四八
許赤虎	涉獵經史、善嘲諷。	應對敏捷、雖言不典故、而南人頗稱機辯滑稽。	魏書四六
李彪	有大志、篤學不倦。	南人奇其審諤。	魏書六二
宋弁	才學備瞻、少有美名。	蹟司徒蕭子良、祕書丞王融等皆稱美之、以爲志氣奮烈不逮李彪、而體韻和雅、舉止閑遯過之。	魏書六三
李諧	風流閑潤、博學有文辭、當時才俊、咸相欽賞。	江南稱其才辯。	魏書六五
魏收	年十五、頗已屬文……以文華顯。 (魏收) 少篤學讀書。(王昕)	听風流文辯、收辭藻富逸、梁主及其群臣咸加敬異。	北齊三七
崔瞻	潔白、善容止、神彩巖然、言不妄發、才學風流爲後來之秀。	瞻經熱病、面多癰痕、善雍容可觀、辭韻溫雅、南人大相欽服。	北史二四
李繪	儀貌端偉、神情朗雋。	梁人重其廉潔。	北齊二九
柳弘	少聰穎、亦善草隸、博涉群書、辭彩雅贍。	占對詳敏、見稱於時。	周書二二

表を見ると、北朝では「篤學」「才學」や、「涉獵經史」といった、學問に關する評價を受けている者が多い。北朝で「學問」といえば、第一に經學を指しており、先の李業興のように、北朝は經學を學んだ人間を積極的に起用しているといえる。一方、文才を評價されている者はそれほど多く見られない。北朝で文才を評價する語が含まれているのは李諧、魏收、柳弘の三人であるが、南朝でもその文才が評價されたのは魏收ただ一

人のみであった。

南朝での評價を見ると、高推、李諧は才辯を稱されており、また、許赤虎の「機弁滑稽」、柳弘の「占對詳敏」も同じように受け答えの妙を稱されたものである。次いで宋弁、崔瞻の二人が辭韻の溫雅で舉止の優雅であることが評價されている。一方で、文才をもって評價されている魏收・王昕の遣使は他に例をみない例外であるといえるだろう。北朝では文才を評價されていた李諧と柳弘は、南朝では辯才を評價されており、北朝の中では文才があると評されていたとしても、南朝に行けば特筆するほどのものではなかったと考えられる。

北朝の貴族たちも、文才で優れた人間より、辯才に長けた人間を送る方が、南朝で評價されやすいことを承知していたのであろう。そのため、盧昶や崔陵の例のように、使者を選ぶ基準として文才よりも學才や辯才を優先していたと考えられる。

### おわりに

以上で見たように、南北朝間の使者はそれぞれの國を代表して相手國に赴いていたが、それは貴族層によって選ばれるものであった。彼らは儒學、玄學、佛教や文學など多岐にわたる文化を身につけ、その様々な分野で優秀さを示すことで、自國の權威を高めることを求められていた。經學では北朝が、文學や玄學では南朝が、それぞれ優位に立っており、そのことを南北朝の貴族は承知していた。

文化が多様化し、様々な分野に細分化したことによって、文化の優劣を判じる基準も一つではなくなっていた。文化の優劣は、個々の局面的積み重ねによって、漠然と決定されるものであり、それゆえ、南北雙方の皇帝は使者が宴席の場面でどのような應對をするか、その一舉一動に關心を拂っていた。

そのような状況の中で、北朝は使節の選考で文才よりも經學や辯才を重視し、南朝文化に對して少しでも優位に立とうとしていた。それによって、文學や玄學を中心とした南朝の文化を相對化しようとしたのである。無論、北朝で南朝の文人の作品が競って讀まれていたことから分かるように、南北朝の文化バランスを変えるほどの効果を上げていたとは思えない。しかし、これまでに見た事例からは、從來の南朝文化研究で言われているような文化のあり方だけが當時の文化だったわけではなく、多様な文化が南北でそれぞれ異なった價值を與えられている姿を見ることができるのである。

- (1) 岡崎文夫『魏晉南北朝通史』（弘文堂書房、一九三二）二九六頁。趙翼『廿二史劄記』卷十四 南北朝通好以使命為重。
- (2) 梁瀟倉「南北朝通使蜀議」（『北朝研究』三、一九九〇）、牟發松「南北朝交聘中所見南北文化關係略論」（『魏晉南北朝隋唐史資料』一四、一九九五）。
- (3) 張承宗「魏晉南北朝時期的南北交往」（『中國史研究』一九九四—三、一九九四）。
- (4) 吉川忠夫「徐陵」（『侯景の亂始末記』中央公論社、一九七四收錄）。矢嶋美都子『庾信研究』（明治書院、二〇〇〇）內編第一章第二節「庾信に傳わる新野の庾氏の遺風」。
- (5) 吉川忠夫「島夷と秦虜のあいだ——典籍の流伝を中心とした南北朝文化交流史——」（『東方學報』京都七二、二〇〇〇）。
- (6) 元徽初、遣北使、朝議令善明舉人、善明舉州鄉北平田惠紹使虜、贖得母還（『南齊書』卷二十八 劉善明傳）。
- (7) 朝議については、渡邊信一郎『天空の玉座』（柏書房、一九九六）三五—四二頁參照。渡邊は六朝時代の朝議の特徴として、公卿議が定例化するとともに皇帝權に對する獨自化を強めていたこと、禮官議や實態としての法官議など専門會議の特殊化などを擧げている。なお、北朝の議については窪添慶文「北魏の議」（『魏晉南北朝官僚制研究』汲古書院、二〇〇三所收）、南朝の議については中村圭爾「南朝における議について」（『人文研究』一〇、大阪市立大學文學部、一九八八）をそれぞれ參照。
- (8) 「贖」とは、北魏によつて捕らえられた南朝士人の家族を、身代金を拂うことで取り戻すことである。
- (9) 天平末、魏欲与梁和好、朝議將以崔悛為使主。悛曰「文采与識、悛不推李諸。口類、諸乃大勝。」於是以前兼常侍、盧元明兼吏部郎、李業興兼通直常侍聘焉（『北史』卷四十三 李諸傳）。
- (10) 子湛、字处元。涉獵文史、有家風。為太子舍人、兼常侍、聘陳使副。襲爵涇陽男。渾与弟繪・緯俱為聘梁使主、湛又為使副、是以趙郡人士、目為四使之門（『北齊書』卷二十九 李湛傳）。
- (11) なお、李湛傳で「四使」として擧げられた四人の他にも、武定五（五四七）年には李繪の弟の李系が聘梁使に任ぜられている。
- (12) 謝氏は宋、南齊時代には全く使者を出していないが、梁以降になると使者が選ばれるようになる。謝氏の名族としての地位が南齊から梁にかけて徐々に低下していったことと合わせて考えると、やはり最も良いとされる家柄ではなく、そこから一段落ちるとされた家柄に使者が集中しているといえる。
- (13) 吉川前掲論文によると、北齊の天保七（五五六）年、皇太子に供する書の校訂のため、邢子才、魏收、辛術、穆子容、司馬子瑞、李業興の六人から書を借りる議があつた。このうち、魏收、穆子容、李業興の三名は東魏から梁へ使したことがあつた。
- (14) 江東復有一吳兒老翁蕭衍者。專事衣冠礼楽、中原士大夫望之以為正朔所在。我若急作法網、不相饒借……士子悉奔蕭衍（『北齊書』卷二十四 杜弼傳）。
- (15) 川本芳昭「魏晉南北朝時代の民族問題」（汲古書院、一九九八）第一篇第一章「五胡十六國・北朝時代における華夷觀の變遷」五九頁。
- (16) 宴日、齊文襄使左右謁之、賓司一言制勝、文襄為之拊掌。魏使至梁、亦如梁使至魏、梁武親与談說、甚相愛重（『北史』卷四十三 李諸傳）。
- (17) 衍散騎常侍朱异問業興曰「魏洛中委粟山是南郊邪」。業興曰「委粟是圓丘、非南郊」。异曰「北間郊・丘異所、是用鄭義。我此中用王義」。業興曰「然。洛京郊・丘之處專用鄭解」。异曰「若然、女子逆降傍親亦從鄭以下」。業興曰「此之一事、亦不專從。若卿此間用王義、除禪應用二十五日、何以王儉喪礼禪用二十

七月也」。昇遂不答（『魏書』卷八十四 李業興傳）。

- (18) 鄭玄の學は本文『尙書』を重んじ、經典の文言に嚴格に従うのが特徴であり、中央集權的な性質を持っていた。一方、王肅の學は古文系の經典を重んじ、文言ではなくその精神に従おうとするが特徴で、地方分權的な性質を持っていたとされる（藤川正數『魏晉時代における喪服礼の研究』敬文社、一九六〇 附説一八一—一九四頁）。

(19) 蕭衍親問業興曰「聞卿善於經義、儒・玄之中何所通達」。業興曰「少爲書生、止讀五典、至於深義、不辨通釈」（『魏書』卷八十四 李業興傳）。

(20) 衍又問「乾卦初稱『潛竜』、二稱『見竜』、至五『飛竜』。初可名爲虎。問意小乖。業興對「字識膚淺、不足仰酬」（『魏書』卷八十四 李業興傳）。

(21) 衍又問「易曰太極、是有無」。業興對「所伝太極是有、素不玄字、何敢輒酬」（『魏書』卷八十四 李業興傳）。

(22) たとえば『隋書』經籍志では、四部分類が行われ「史部」が獨立している。渡邊義浩「史」の自立」（『三國政權の構造と「名士」』汲古書院、二〇〇四收録）参照。

(23) 森三樹三郎『六朝士大夫の精神』（同朋舎、一九八六）一八二—一八三頁

(24) 上以融才辯、十一年、使兼主客、接虜使房景高・宋弁。弁見融年少、問主客年幾。融曰「五十之年、久踰其半」。因問「在朝聞主客作『曲水詩序』」。景高又云「在北聞主客此製、勝於顏延年、實願一見。融乃示之。後日、宋弁於瑤池堂謂融曰「昔觀相如封禪、以知漢武之德。今覽王生詩序、用見齊王之盛」。融曰「皇家盛明、豈直比蹤漢武。更慙鄙製、無以遠匹相如」（『南齊書』卷四十七 王融傳）。

(25) 邢子才・魏收俱有重名、時俗準的、以爲師匠。邢賞服沈約而輕任昉、魏愛慕任昉而毀沈約、每於談議、辭色以之。鄴下紛紜、各有朋党。祖孝徵嘗謂吾曰「任・沈之是非、乃邢・魏之優劣也」（『顏氏家訓』文章篇）。

(26) 『北史』卷八十三 溫子昇傳の、梁使の張臯が溫子昇の文筆を江南に傳え、梁の武帝がそれを讀んで稱賛したこと、陽夏太守の傅縡が吐谷渾に使いし、國主の枕元に溫子昇の書があるのを見たことなど、彼の文章が廣く讀まれていた事例がほぼ唯一である。

(27) 梁使每人、鄴下爲之傾動、貴勝子弟盛飾聚觀、禮贈優渥、館門成市（『北史』卷四十三 李諧傳）。

(28) 尙書僕射崔暹爲文義所親任、勢傾朝列、休之未嘗請謁。暹子達孳幼而聰敏、年十余、已作五言詩。時梁國通和、聘使在館。暹持達孳數首詩示諸朝士有才學者、又欲示梁客。余人畏暹、皆隨宜應對、休之獨正言「郎子聰明、方成偉器。但小兒文藻、恐未可以示遠人」（『北史』卷四十七 陽休之傳）。

(29) 興和中、兼通直散騎常侍、使蕭衍。衍深耽積學、遂集名僧於其愛敬・同泰二寺、講涅槃大品經。引同軌預席、衍兼遣其臣並共觀聽。同軌論難久之、道俗咸以爲善（『魏書』卷三十六 李同軌傳）。

(30) 魏・梁通和、要貴皆遣人随聘使交易、暹惟寄求仏經。梁武帝聞之、爲繕寫、以幡花贊唄送至館焉。然而好大言、調戲無節。密令沙門明藏著仏性論而署己名、伝諸江表（『北齊書』卷三十 崔暹傳）。

(31) 鎌田茂雄『中國佛教史』第四卷「南北朝の佛教（下）」（東京大學出版會、一九八四）第三章第五節 士大夫の佛教 参照。

(32) 高祖時、有范寧兒者善圖碁。曾与李彪使蕭蹟、蹟令江南上品王抗与寧兒。制勝而還（『魏書』卷九十一 蔣少游傳附范寧兒傳）。ただし中華書局本は同個所に張森楷の注を引いて「兒」下当有脱文」とある。



(33) 五年、梁使來聘、云有武芸。求訪北人、欲與相角。世宗遣猛就館接之。雙帶兩鞬、左右馳射。兼共試力、挽強。梁人引弓兩張、力皆三石。猛遂併取四張、疊而挽之過度。梁人嗟服之。〔北齊書〕卷四十一 慕容猛傳。

(34) 高祖詔昶曰「卿便至彼、勿存彼我。密邇江揚、不早當晚、會是朕物。卿等欲言、便無相疑難」。又敕副使王清石曰「卿莫以本是南人、言語致慮。若彼先有所知所識、欲見便見、須論即論。盧昶正是寬柔君子、無多文才、或主客命卿作詩、可率卿所知、莫以昶不作、便復罷也。凡使人之體、以和為貴、勿遽相矜誇、見於色貌、失將命之體。卿等各率所知、以相規誨」。〔魏書〕卷四十七 盧昶傳。